

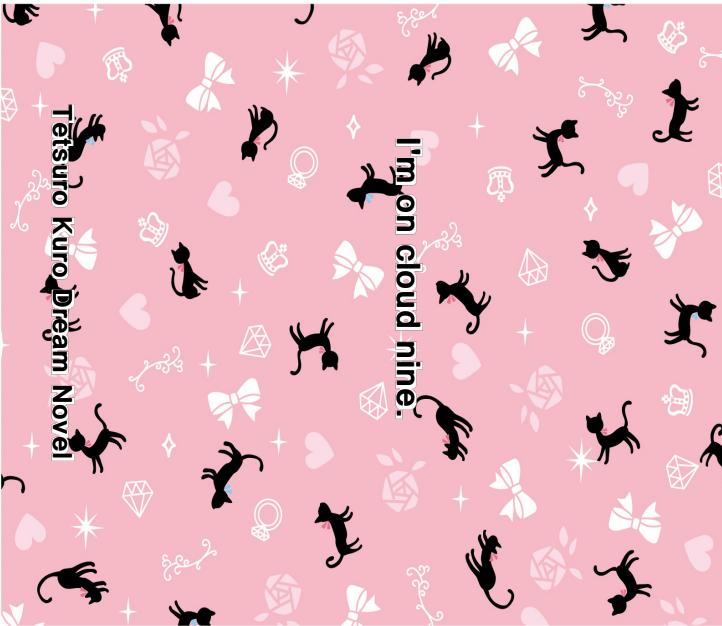
「長い時間かかるんだよ」
「俺が風呂入って何分経ったよ？」
「いい時計見てない。ついでに黒尾くんが早すぎると
「やない？ ちゃんと洗った？ いや、黒尾くんが早すぎると
「失礼な。健めっちゃん引きれい好きだぞ」

ドライヤーの温風になびく髪が伸びたことを実感する。それでいぶん髪が伸びたことを実感する。ロングヘアの美容院に行くのをさぼつただけで、こんなに髪を乾かすのに隔離時間がかかるようになることは思わなかつた。面倒くさいし鬱陶しいけれど、自分のために手間暇かけているこの時間は嫌じゃない。ボタニカルシャンプーの爽やかで甘い匂いが私を包んでうつとりする。

黒尾くんはしぶしぶ洗面所に戻ると、首にタオルを引つかずくが落ちてしょ。後で滑るんだから」

「拭いたよ？」

「ちよつと、ちゃんと拭いてよ」



あかざ
2019.7.20
<http://cherrywind.ciao.jp/mc/>
twitter @mahoubiscuit

魔法ミステリ 5周年企画

いる髪が、濡れてぺたりと額に張り付いている。たつたそれだけの変化なのに印象は驚くほど変わる。突然大人っぽくなつて、目元が隠れることで表情に憂いが生まれるのだ。私は唇を噛んで笑いをこらえた。どんなに大人っぽくセクシーに見えても、中身は黒尾くんだ。お調子者で意地悪でちよつとだらしがないところがたまにキズなどころは、高校生の頃と何ひとつ変わっていない。

「は、いい、ドライヤーどうぞ」

「俺はいいよ」

「え？ なんで？」

「ほつとけば乾くし」

「でも、ほつとくと髪の毛がびがびにならない？」

「言つてから、はつとした。そういうえば黒尾くんの髪はいつ

「あ、もうなつてたか」「お前つて、本当に何気なく失礼なこと言うよな」「失礼、なんて思つてもないくせに」「まあ、思つてないけどね」黒尾くんは尖つた歯を見せていたずらっぽく笑う。高校生の頃は、こんな風に笑われるとたび腹が立つてしまうがなかなかつたからかわかれているか、ばかにされているか、むしろその両方だと思つていた。今はそんなこと思わずと一緒に笑える黒尾くんのこのいじわるな性格に、私は慣れただろうか？自分のことなのによく分からぬけれど、悪い気はしない。そうでなければ、濡れた髪から零を落としてフローリングを濡らして平氣でいられるような人とは一緒に暮らせない。ドライヤーのコードを巻いて引き出しにしまう。黒尾くん

は長い足を伸ばしてベッドにごろりと横になり、枕元に置いていたタブレットの電源を入れた。隣に寄り添って手元をのぞき込むと、案の定バレーの動画だった。

「私はけんなりして文句を言った

「またこれ？」

「またって何だよ。これ見るのは今日初めてだぞ」

「違うのが分かんないよ。前に一緒に見たのと違うの？」

「あれはブラジル対イタリアで、これはアメリカ対中国。全然違うんだろうが」

「そんなのいちいち覚えてないよ。私、ネットフリで見たいドラマあるんだけどど

「じやあ自分で見れば？」

「いつしょに見ないどつまんないじやん」

「じやあこれ見終わつたらな」

「ええ、ひと試合見終わつたら何時？」 寝ちゃうよ

「本当に子ちゃんまだねえ。明日休みなんだから夜更かし
ようぜ」

黒尾くんはふつと息を吐くように笑うと、私の肩を抱くよ
うに腕を回してきた。黒尾くんの広い肩を枕にすると、タブ
レットはよく見える。前に見たものと何が違うのかも分から
ないいつまらない動画だつたけれど、黒尾くんの肩の高さは私
の頭を支えるのにぴったりだ。一緒にドラマ見られたとして
も、眠気に負けてしまうとしても、どちらにしてもここにい
られればなんでもいいような気になるからちょっと悔しい。

黒尾くんの濡れた髪が私の頬にあたる。それはひんやりと
冷たくて、眠気覚ましにはなりそうだ。私は黒尾くんの胸に抱
きついて、タブレットから聞こえる歓声に耳をすませた。これ
が何年たってもまともにルートルも覚えられないけれど、これ
が黒尾くんが大好きな世界だ。